

徘徊したわたし

A table

wondering

around the table

Kyoji

市内に住むわたしはふつうの高校三年生の女の子です。ふつうの女の子は自分で自分をふつうだなんて言ったりしない気もしますが、女子高だから許されるんです。ほんと。

そろそろオープンキャンパスなんかに出向いて大学の見学でもしたいなあってときに、ちょうど近くの大学でそんなかんじの催しがあるみたい。これは出向かずにはられません。

大学ってどんなところなのかなあ。

わたしはひとりっこで、まわりに大学生の知り合いなんていないから、大学なんて未知の世界でミチミチってかんじ。ふふ、わたしっておちゃめ。

え？ おもしろくない？

もう、そういう人は関西にでも行ってお笑いの勉強してきたらいいのよ。

わたしはこれでも関西っ子なんですからね！

みんなより、少しはオモシロイこと言えるんだから！

百万遍っていう交差点のすぐ近くにあるわたしの家のすぐ近くにあるその大学は、ちょっとわたしの学力では入れそうにない。ちょっとなんてケンキョな言い方してみたけど、もう全然。富士山を逆立ちしてのぼるくらい無理。

だから、狙うはもっと低いところ。浅間山くらい低いところ。それでも逆立ちでは無理だけどね。まあ、浅間山の高さもどこにあるのかも知らないんだけど。

うーんそうだな、立命館とか？ あ、同志社女子でもいいかも。それでもけっこう苦勞するだろうけど。

ああ、学費がなあ。お母さんは「心配するな」なんて強気で頼もしいこと言ってくれてるけど、子供のわたしなりに家の財政を考えると、やっぱり私学はキツイよねえ。

じゃあ国立目指しちゃう？

いやいや、今からはとっても無理。

とってもとっても。

むーり。

ああ、なんかすごいネガティブ思考だ。

いかんよいかんよ。

でもまあ、とりあえず大学ってところを見学してみるところからはじめてみましょうか。それから悩んだり落ち込んだりヘコんだりしてもいいでしょう。たぶん。

オープンキャンパスの日。

わたしは近くの大学に足を運んでみました。

んん、なんかいろいろやってる。

ちっちゃなお祭りってかんじ。

そういえばちっちゃい頃はよく大学祭に来てたなあ。

なんか最近は来てないけど。

やっぱり部活で忙しかったから。

ん、わたし、これでも新体操部なんですよ。身体とかチョーやわらかいから。「折れんじゃない？」ってくらい曲がるよ、腰。

さてさて、あたりを見渡してみると。

...

.....

.....

大学って、こんなだっけ？

なんか、施設みたい。なんのってきかれたら答えらんないけど。

ここ、勉強するところなのかなあ。

あ、あの時計のついてる建物知ってる。この大学の顔みたいなもんだもんね。総長がつくったとかいうレトルトカレーに載ってたっぽいし。

とりあえず、ぐるぐる歩いてみよ。

あれ、何？

人？

え、あの人たち、何してんの？

だって、

ここ、外だよ？

そこにいたのは、校内の道路のど真ん中で、こたつに入って鍋をつついているふたりの男女だった。

ちょっと近くに寄ってみて、ちょっとだけ観察しよう。

たぶん大学生。

若いし。

だだ、その、

どてらっていうの？

その柄はないんじゃないかなあ？

きっらきらのラメ入りで、山とか鳥とかなすびとか書いてあるし。

めっちゃくちゃムラサキだし。

正直どぎつい。

ていうか、今日そんなに寒い？

わたし、ブラウス一枚なんですけど。あ、制服のね。

しかも鍋。

めっちゃめっちゃ赤い。

辛そう。

絵具入れたんじゃない、ってくらい赤いよ？

寒いの？ それとも変なの？

なんか話してるみたい。

わたしはごわごわした、ええと、これなんて言うんだろ、ブッシュ？に隠れて大学生の様子をうかがった。

M「ねえ、慎也あ」

S「なんだ」

M「アリとギリギリスについて話そうよお」

S「なぜだ」

M「私ちょっと、思うところがあるんだよねえ」

S「じゃあ話せ」

M「あれってさあ、不自然じゃない？」

S「すべてが？ それともある特定のポイントに絞った評価か？」

M「うーんとお、ギリギリスが」

S「ギリギリスがどうした」

M「だってさあ、冬が来んのわかってんのに自分の命の危険もほったらかして遊び呆けるような奴っている？」

S「ギリギリスがそうだろう」

M「だからあ、それが不自然だって言ってんの！」

S「しかしそこを否定したら、話として成立しないだろう。ある程度の妥協をベースとしたゆるい設定こそ、物語を紡ぐうえで重要なファクターとなるのだ」

M「でもお、私あれは許せないんだよねえ。それにアリもよ。なんなの？ 自分だけさっさと巣穴に引っ込んで外で凍死しそうなギリギリスをあざ笑うなんて性格悪すぎない？」

S「むかしの物語のキャラクターはえてして性格がひん曲がっているものなのだ」

M「やな感じよねえ。あんな友達最低よ！」

S「しかし現代版では、原作があまりにも辛辣かつ残酷だということでリニューアルされたヴァージョンが確認されている」

M「え、そうなの？」

S「アリは、哀れなギリギリスに食べ物を分け与えて一言嫌味をぶつけるのだ。『私は、夏にせっせと働いていた時、あなたに笑われたアリですよ。あなたは遊び呆けて何のそなえもしなかったから、こうなったのです』とな」

M「何それえ、チョー性格悪いんですけど！ 全然なおってないじゃん！」

S「戒めの言葉はある程度辛辣でなければならないのだ」

M「しかも食べ物まであげちゃうわけえ？ 何そのボランティア精神って感じ。だいたいアリの食べ物をギリギリスが食べられるとは思えないんですけど。ギリギリスって何食べんの？」

S「さあな、雑食なのではないだろうか」

M「遊び呆けて雑食なんて、ホストみたい」

S「揶揄が飛躍しすぎだ」

M「でも理解できるでしょお、慎也なら？」

S「理解のための材料はある程度提供されているから、飲み込むことは不可能ではない」

M「よくわかんない」

S「そもそも原作ではギリギリスではなくセミだったのだ」

M「セミい？ あの夏にやたらうるさくてすぐ死んじゃうやつらあ？」

S「そいつらと同一種ではないだろうが、生物としての分類は同一だろう」

M「へええ、知らなかったあ。ていうかセミだったら夏のうちに死んじゃうから冬まで話持てけないんじゃないの？」

S「当時のセミは長生きだったのだろう」

M「御都合主義的にギリギリスにかえちゃったわけだ。やっすうい」

S「むかし話など、すべてチープなものだ」

え、ちょっとこの人たち何言ってんの？

アリとキリギリス？

童話の？

イソップだかウソップだか知らないけど。

しかもそれをすごい真剣に話してるんですけど。

どうなってんの？

それって、なんかの勉強なわけ？

うん、たぶん絶対そうだ。なんか文学部かなんかの人たちで、童話を勉強してるんだ。

それなら納得。

しかしなあ。

この光景どうよ。

外でこたつに入って鍋つついて、馬鹿みたいなどてら着て童話について討論？

すごいシュール。シュールって意味はよく知らないけど、たぶんこういうシチュエーションで使うんだと思う。

でもまあ。

大学だしね。

いろんな人がいるよね。

次行こっと。

なんか、廃墟みたいなのがあった。

なんだろ、これ？

おばけ屋敷の催しもの？

オープンキャンパスってそんなサービスもあるの？

にしても、オープンキャンパスでおばけ屋敷はないでしょ。

高校生のやる学園祭とは違うんだよ？

もっと高度なっていうか、なんかすごいやってほしいよね。

まあ、ちょっとのぞくくらいならいいや。

玄関の段差をのぼってロビーに通じるドアを引いて開ける。

え。

なんなの？

どうしてこの人たち、

ここにいるの？

ロビー中央にはふつうソファとか小さなテーブルがあるんだけど、かわりにさっきのこたつがあった。ふたりの男女もセットになっている。ついでに鍋も。

またなんか話してるし。

ここを通りすぎないと次に行けないんですけど。

できるだけ視界に入れないようにしながら、わたしはロビーの端っこぎりぎりをこしょこしょ通った。

自然と、ふたりの会話が耳に届いてきて、わたしはなんとなく足を止めてしまった。

M「北風と太陽ってさ、チョーエロい話じゃない？」

S「どのへんに艶美さがあるのだ？」

M「エンビさ？ パイプのこと？」

S「塩化ビニルパイプではない」

M「なあんだ」

S「つまり、どのあたりに官能的な要素があるのだ、ときいている」

M「だってさあ、北風も太陽もふたりで相談して旅人を脱がそうとするんだよ。しかもそれを競うって、どんな変態よ！」

S「どちらが先に相手を懐柔できるか、という争いなら現代でも普通に行われているだろう」

M「何慎也、ちょっとやらしいのとか好きなの？」

S「俺個人の嗜好はどうでもいい。問題のすり替えには乗らない」

M「ふうんだ」

S「彼らは自分たちの能力を競ったのだ。服を脱がせるというのは目的達成の手段にすぎない」

M「でもお、脱がそうっていう発想自体がもうエロエロだよ。男ふたりでさあ、どっちが先にあの娘を脱がせるかって競争とおんなじじゃん」

S「そのとおり。どちらも能力を競っている。本質的な差異はない」

M「だからあ、エロいねって言ってんの！」

S「エロというのは、官能的な、という意味ではないのか？」

M「いやそうだけど、今を生きる私たちはもっと今に即した意味で言うんですう！」

S「『今に即する』とはどういう意味だ？」

M「あんたがいっつも私の胸元みて妄想してるような意味よ！」

S「それはお前が見てくださいとでもいうような服装をしていることに非があると考察できる。生理学的に、男は種の保存のために興奮するものを求め——」

M「あーあーあー！ うっとおしい！」

女の人の大声にびっくりして、わたしはその場から早足で逃げ去った。うしろで「んー？」とかいう声が聞こえてきた。なんか背中に視線を感じる。

しばらく走ってテニスコート脇を通り、いったん外の道路に出ることにした。

はあ。

なんか安心。

でも今のはちょっとこわかった。

なんか、いろんな意味で。

物理とか、よく知らないけど、あの人たちが移動するのって物理的に無理じゃない？

そうとしか考えられないんだけど。

でもそこがちょっとこわいっていうか、オモシロイよね。

話も聞き入っちゃった。

北風と太陽の話。

ぼんやりとしか知らないけど、北風と太陽がエロいだなんて考えたこともなかった。

でもたしかに、ちょっとエッチみたい？

脱がすんでしょ、だって。

その考えがすごいよね。

あ、でも、べつに裸にさせようとかそういうんじゃないくて、たしか上着だけって話じゃなかった？

上着だけならまだねえ、セーフかも。

ブラウスまで剥がれちゃったら、ちょっとね、エッチ。

はあ、疲れた。

さて、家に戻ろうかな。

おなか減ったし。

東山通りを北に歩いていくと、バス停の前にすごい変なものを見つけた。これで三度目だ。

めっちゃめっちゃ人が集まってるんですけど。

みんな遠巻きにしてるし。

すごいじゃま。大学生って他人へのメイワクとか考えないわけ？

ん、なんかすごい盛り上がってるみたい。

わたしももっと近くに寄ってみよっと。

M「こないださあ、鴨川に時計落としちゃったんだあ」

S「そうか」

M「でねえ、それ私の時計じゃなくてカレシのなんだけどお、落としちゃったっていうか、放り投げて叩きこんでやったの」

S「穏やかではないな」

M「だってムカついたんだもん」

S「そうか」

M「あのねえ、もっと私に興味持ってもいいんじゃない？ あんたこういう話題には触手が動いたりしないの？」

S「触手だと？ そんなもの、俺には備わっていない。人間なのだ。触手などというなんのためにあるのかわからない、機能性に乏しい器官など、進化の過程で失われてしまったのだろう」

M「それ、わざと言ってる？ めんどくさあい」

S「お前の話が具体的でまわりくどいのだ。もっと要点を絞って抽象化しろ」

M「だから私が言いたいのはね、『金の斧』の話知ってる？ ってことよ！」

S「.....なぜ、そうなる」

M「カレとね、川沿いのお店でカプチーノ飲んでたの。あのつまようじで絵を描いてくれるやつ。でねえ、しばらくお話して、お店を出ようとしたらカレね、領収書さっと取ってひとりレジに行っちゃうのよ！ どう思う？」

S「どうも思わないが」

M「なんでよ！ 私はカレの態度が気に入らなかったの！」

S「どの点が気に入らなかったのだ？」

M「さっと伝票取ってレジに行っちゃう態度よ！ あたかも当然のように！」

S「つまり、ふたりに支払について話し合う機会を与えてもらえなかったことに憤慨しているのだな。これはあくまで俺の憶測にすぎないのだが、その彼氏は店を出たあとにお前に請求するつもりだったのではないのか？」

M「それもなかったから怒ってるの！ あのクソ野郎、私を飼い犬かなんかと間違えてんのよ！ 絶対そう！」

S「なんとなくだが、お前のその感性は一般的ではないように思うぞ」

M「なんでよう」

S「一般論として、男が女に奢るというのは、それほどたいしたことではない。そういう男の存在は世間的に広く認知されている。絶対数でいえば、決して少なくないはずだ。その彼氏がマジョリティーを気取ろうとしたことは、さほど重要視されないのが普遍的観察である。また、話の流れから『金の斧』の話はまったく関連性が見られない」

M「そのあと絡んでくるのよ、斧の話は。で、ムカついて言ってやったのよ。『なんで私にも払わせてくれないのよ、私をなんだと思ってんの！』って。んでえ、あの馬鹿の腕時計をはぎ取って、橋の上から下流に叩きこんでやったってわけ」

S「で？」

M「でえ、そのときふと思ったわけ。この時計古いなあって。だから、もしかしたら川の中から女神さまが水の足場に乘って、どどーんてせりあがってきて私の目の前に来てくれないかなあって」

S「ああ、やっと話がつながったな」

M「そうそう、でねえ、もし女神さま来たらさ、きいてくるじゃない？ 『これは汝の落とした時計かい？』って。んでえ、手に持ってんのはロレックスの金時計なわけ。私ったらそれほしいからあ、言うわけよ。『いいえ、違います』『では、これかい？』今度はブルガリよ。『いいえ、違います』『そうか。間違えてすなまかったねえ』え？ 帰っちゃうの？ ちょっと、正直に言ったら全部くれるんじゃないのお？」

S「途中から、話を書き換えているぞ」

M「そりゃそうよお、あんな都合のいい話あるわけないじゃん。だいたい、女神さまに人間の時計の価値なんてわかるわけないもん。ロレックスもブルガリも、じつは偽物なわけ。うさんくさい中年が車のトランクで路上販売してるようなやつよ」

S「つまり、お前オリジナルの『金の斧』を聞いてくれってことだな？」

M「そうそう。ぜえったい不自然だもん、あの話。あの女神って誰だっけ、エルメス？ 靴しかわかんねえくせに、なんで金の斧持ってんのよって感じ」

S「ヘルメスじゃなかったか？」

M「どっちでもいいわよ、そんなの」

S「そうだな、どちらでも大差はない。つまり、正直に答えて金銀の斧をもらおうが、古くさい斧ひとつ失おうが、きこりの人生にそれほど影響を与え得るとは思えない。きこりに金銀をさばくルートがあるとも思えないし、あったとしても所詮きこりだから、すぐ騙し取られてしまうだろう。結果として、自分の斧が戻ってくるかこないかだけだ」

M「うん、まあ、私が言いたいのはそんな感じ」

S「さらに、設定としてきこりは木を切っている最中に手を滑らせて湖に落としてしまうのだが、どんな手の滑り方をすれば、湖に斧が飛んでいくのかという状況が不明だ。また、ほかにも想像される状況として、きこりが切っていた木は湖のすぐそばにあるだろう。下手をすれば木が湖にどぼんと倒れてしまうかもしれない。また、そんな場所でひとりきりで仕事をしていたというイメージは、じつに不自然だ」

M「さっすがあ、いちゃもんの天才よね、慎也って。そういうところ、好きかも」

S「俺を好きになったところでなんら得るものはないぞ」

M「んん？ そんなことないよお？」

S「いやある」

M「どうしてえ？」

S「お前には彼氏がいるし、俺はじつは結婚しているからだ」

M「は、」

S「嘘だ」

M「……」

S「どうした？」

M「っん、死ね！」

S「こんな冗談も聞き流せないとは、まだまだだな。どうせ彼氏の話も嘘だろう。お前も、本当はじつに哀れな奴なのだからな」

M「……帰る！」

S「好きにしたらいい」

女の人が怒って立ち上がってどっか行っちゃった。ちょうど来たバスに飛び乗って、走り去っていくのを男の人が眺めてる。鍋つつきながら。

大学生ってオモシロイなあ。

なんで怒ったのかわたしにはよくわかんない。

なんか気に食わなかったんだろうな。

あ、男の人半笑いだ。

う、

目があった。

ええ、すごいこっち見てるんですけど。なんで？

遠巻きにしてた人たちもバスに乗り込んだりそのまま信号渡ったりして散っていった。わたしも通りすぎてもっかい北に戻ろうっと。すごい見られてるけど、ムシムシ。

こたつから一メートルくらい距離をとってすぎようとするときに、するりと男の人の手が伸びてきてわたしの脚を掴んだ。

「ぎゃ」

変な声出ちゃった。ていうかびっくりするって、普通。

「な、な、何？　なんですか？」

うまくしゃべれない。乾燥した空気がダイレクトに肺に入ってきて、声帯がやられちゃったみたい。でも単にびっくりしてるだけかも。

「君」

こたつに入ったまま柔らかい笑顔で男の人は言った。

「タバコ持ってる？」

「も、持ってません！」

掴んでいる手を思わずあしげにして、わたしは通りを北に向かって全力疾走した。

その日の夜。

お風呂からあがって自分の部屋のベッドでわたしは左足首をさすっていた。

ええ、めっちゃめっちゃ真っ赤じゃん。

なんなの？　あの人なんなの？

こたつに入った変人みたいな男の人に掴まれたところが真っ赤になってる。紅葉したでっかいもみじを貼りつけた感じ。

そんなに痛かったわけじゃないのにな。

あ、もしかして拒絶反応？

絶対そうだ。

わたしの身体があの人との感觸を拒否したんだ。

あれ、なんて言ったっけ？

えーと、そう、アレルギー！

わたし、大学生アレルギーなんだ。

どうしよう、困ったなあ。大学生アレルギーじゃあ、大学に入れないじゃん。

あ、でもでも、触られなけりゃ大丈夫なのかな。校内を歩いてても平気だったし。

大学生がダメなんだよ、そうそう。

触られなけりゃいいんだ。

でも触れないとなると、困ったことになるぞう。

だって友達できないってことじゃん？

友達になったからってべたべたするわけじゃないけど、軽いタッチくらい普通にあるよね。それが無理ってことになって。

つまり、

わたしは大学に行かないべき？

ええ、でもでも、大学って友達つくりに行くところじゃないし。

でも友達いないとつまないし。

うーん、どうしたらいいんだろう。

次の日、学校で昨日考えてたことを友達に話したら散々馬鹿にされた。

ていうかみんな大爆笑。

何？ わたし真剣に悩んでるんですけど？

みんなして馬鹿笑いして。そんな大口開けて笑ってたら女子力が落ちちゃうよ。

一日中笑いのネタにされて、げっそりうんざりしながら放課後を迎えて、教室の掃除をしてゴミを焼却炉に捨ててに行ったところに、信じられない光景が目飛び込んできた。

ありえない。

不法侵入！

また例のこたつだ。しかもあれ何？

マジで？

焼却炉をストーブにしてる！

大学生らしい男女は、焼却炉のすぐ前にこたつを設置して「さむいさむい」とか言いながら手をこすこすしてる。

ええ、どうしよう。

先生に言いに行ったほうがいいのかな。

わたしはとりあえずこの場から立ち去ろう。それが一番大事。

でもまたなんか話してるし。

わたしはとりあえず校舎の端っこに隠れながら、様子をうかがうことにした。

M「慎也あ」

S「なんだ」

M「私、きれい？」

S「一般的視点からの観察によると、お前は美人だ。しかし、俺個人の観察からは、普通と言わざるを得ない」

M「ふうん。要するに、自分には足りないって言いたいわけねえ。私じゃ足りないっての？」

S「そんな議論は不要だ」

M「ところで、アフロディーテの話をしようか」

S「その議論は不要と切り捨てるには尚早だな」

M「学の足りない女の子は知らないだろうけど、あの女神さまはあらゆる女の子にとって理想の武器を持ってるんだからねえ」

S「そう。それは？」

M「エロスよ！」

S「つまり、艶美だと？」

M「違うわよお、エ・ロ・ス！ あの愛の矢を持った従者よ。キューピッドとも言います」

S「あれが、どうして理想の武器なんだ？」

M「だってえ、エロスに矢を引き絞ってもらうだけで、あらゆる男を恋に落とせるんだからね！」

S「つまり精神操作だな。つまらん能力だ」

M「なんでよお」

S「たしか、胸を射抜かなければいけないのだろう？ つまり矢が身体を貫通するわけだ。死ぬだろう、普通？」

M「そういう物理的な矢じゃないのよ、きっと」

S「それなら、矢のかたちをしている必要がない。不可避のものを選ぶのがいいだろう。何もわざわざ避けられるかもしれない矢を放つ必然性がない」

M「それを狙うってところに、こう、愛の試練があるのよお」

S「お前は、アフロディーテの生い立ちを知っているか？」

M「生い立ちは、知らねえなあ」

S「そんな口のきき方は許さん」

M「何よお、あんたに言われる筋合いないんですけどお。You can't tell me what to doってやつよ」

S「それは用途が違う。むしろYou can't talk to me like thatが近いだろう」

M「もういいから、細かいなあ。で、その生い立ちってのは？」

S「オリュンポス十二神の中で彼女の立場は極めて特殊だ。唯一、神々の兄弟姉妹や子供ではない。彼女は、ティタン神族の王であるウラノスが切り取られた男根が海で吹いた泡の中から生まれたのだ」

M「ダンコンって？」

S「ペニスのことだ」

M「はあ？　じゃあ、その、こう、人間的な出生じゃなくて、その、せい——もう！」

S「そう、つまり受精を介した生まれではないということだ。いわば、バグのような存在。イレギュラーだ」

M「でも、その、ダンコン？はもともと、その、神様のな人にくっ、ついてたわけでしょ？」

S「お前は何か？　ペニスに何か深い思い入れでもあるのか？」

M「ちょっとお、それは完全なセクハラですう」

S「俺たちの仲だ。構わないだろう」

M「……べ、べつに」

S「ほう、そうか」

M「何よお」

S「いや、もう興味はない」

M「な、なんなの？　あれ、なんの話してたっけ」

S「お前はキューピッドを所有していない、という話ではないか？」

なんの話してんの？

アフロディーテって誰よ。女優？

聞いたことないけど。

名前からしてすごいアフロなんだろうなあ。

あとエロスとかキューピッドとか言ってるし。

まあたぶん大人な感じの会話なのでしょう。お子様のわたしにはまだまだわかりませんよ、どうせ。

ちょっとひとりでひねくれていたら、うっかり手に持っていたゴミを落としちゃった。大きな音があたりに鳴り響く。

もう、だからカンカンのゴミ箱って嫌い。うるさいんだもん。

それより気づかれちゃったんじゃないかな。

ちらっと、様子をうかがう。

「ひゃっ」

目の前に女の人の顔があった。

「あ、あの」

「あんた誰よ」

「え、と、三年の」

「三年は見たらわかるわよ」

え、なんでわかんのか？

「あ、君は」

男の人もひょいと顔を出した。

「ねえ、タバコ持ってる？」

いやだから持ってるわけじゃないじゃん。

「持ってません。あなたたちはここで何してるんですか」

なんか冷静に言えた。慣れかな。わたしって順応能力高いから。

「んー、ちょっと寒いから暖とってたのよ。あんたもこたつ入る？」

「いえ、いいです。それよりここは女子高内なんですけど」

「だから？」

なんでこの女の人、そんなになんでもないふうなわけ？ 男の人は笑ってるし。タバコに火つけちゃったし。ていうか持ってんじゃない、タバコ。

「だから、よその人は入っちゃいけないんです」

「わたしよその人じゃないよ。ここの先生だよ」

「え？」

え？

？

先生？

「嘘、」

わたしがつぶやくと、男の人が大笑いした。なんか今日はよく笑われる日だ。

「慎也、何笑ってんのよ！」

「いやお前、それは信じてもらえないだろう」

「なんでよう、私ここの先生だよ？」

「まだ違うだろう」

「そうだけど、実習生って先生って呼ばれるし」

「そのゴミをここに持ってきたわけだね？」

急な展開についていくのがやっとなるところに、急に話しかけられてうまく言葉が出てこなかった。

「え、え」

「それは俺が処理しておいてあげよう」

「なんなのあんた。子供に興味とかあるわけ？ ロリなの？」

「ロリとはなんだ？」

「ロリコンよ！ Lolita Complex！」

「ああ、それか」

「変態だったんだ」

「なんとでも言え。俺は興味がない」

いやあんたがロリコンどうのこうのってのはどうでもよくて。

ていうか、わたしそんなに子供じゃないし。高校生だし。

次にすることがわからなくなっちゃった。もうこの場から逃げ出したい。

あ、そうだ。

逃げればいいじゃん？

よし。

「こんなガキンちょに発情するなんてよっぽどたまってんのね。この場所にあんたはふさわしくないわ。もしうっかり性犯罪沙汰なんてことになったら——ちょっとあんた！」

うしろで声がした頃には、わたしは校舎の反対側まで走りきっていて、十分な距離をとっていた。

このまま職員室に直行しよう。それで報告しよう。変な人たちがいるって。

もうなんか、何もかもおかしい。

知らなかったよ、うちの先生がこんなに非常識だったなんて。

まあいろいろ妙な噂とか流れてて、まともじゃないんだなあとは思ってたけど。

女子高の先生って、普通の共学の先生と比べたら絶対変だよな。

変さが色濃いつていうか。

もう、ただのヘンタイ？

だって、そんな、

あんな非常識な人たちを迎え入れちゃうんだから。

結果からいうと、あのこたつ男女は本当に先生だった。ていうか教育実習生だった。

男の人が化学で、女の人が数学。

この情報はまだ生徒の間に広まってない。明日から実習期間はじまるんだって。

じゃあ今日何してたのって思ったんだけど、

どうやら校内を見学してたらしくて、

しかも女の人のほうはここの卒業生らしくて、

だからわたしが三年だってすぐにわかったんだなあと納得。

先輩だったとはね、まあいいけど。

それにしても不思議なのは、

あのこたつよね。

神出鬼没って感じ。

どうやって運んでんのかなあ。

そういういろいろをうちの担任に話したところ、

「美雪はむかしからぶっとんだ奴だったからなあ」

と懐かしそうな顔をしてへらへらしてた。

美雪さんていうんだ。ていうか先生、美雪って呼んじゃうんだ。

まあべつに珍しいことじゃないけど。

次の日。

今日はさっそく実習生の授業です。

男の先生は、名前は慎也っていうみたい。

なんとなく似合ってる感じ。

あくまでぼんやりと、なんとなくね。

それにしても。

カタイ。

カタすぎるよ、慎也先生。

緊張して身体がカタイとかじゃなくて。

しゃべり方。

こたつで聞いてたわたしは冷静に見られるけど。

まわりのみんなはすごい顔してる。

もう、ええええ、みたいな。

でもみんな熱心というか少なくとも無視しないように関心を持ってるのは、その理由はもちろん、慎也先生の魅力だ。

まあ、要は顔がいいのね。

それはわたしも最初から思ってた。

なんかねえ、いい感じなの。

すごいいってわけじゃないし、芸能界に入ってブレイクするかっていわれたらたぶん無理って顔なんだけど、

女子高の授業で注目を集めるくらいにはね、魅力的。

やっぱり男は顔だよねえ。

なんか壊れてるっていうか壊滅的？　みたいな顔はやっぱりないもん。

でもねえ、

カタイんだよねえ。

いつの時代の人なの、って感じで。

べつにわたしたちがわからない言語ってわけじゃないんだけど、日本語しゃべってるんだけど、難しいの、言ってることが。

単語が難しすぎるよ、教科書に載ってないよ、そんな言葉。

あ、化学の先生ちょっと怒ってる？

教室の一番うしろでいつもの化学の先生が腕組みして授業を観てるんだけど、表情がこわばってる。納得いってないみたいな。

あとで怒られるんだろうな、慎也先生。

なんかなぐさめに持ってってあげようかな。

あ、でも、そんなことしたら美雪先生が怒っちゃうかも。

え、ていうか、あれなの？

ふたりはどうなってるわけ？
単におんなじ学校に来た実習生？
それとも、彼氏彼女なわけ？
うーん、どうやって調べたらいいかなあ。
うん？
わたし、なんでこんなこと考えてるんだろ。

さすがに先生たちは学校でこたつを展開したりはしなかった。
そりゃそうね。そんなことしたら、クビになっちゃうもんね。
学校の先生ってクビになったりするのかはよく知らないけど。
もう先生たちが学校に実習に来て二週間が経ちました。
早いよね、月日の流れって。
ひゅん、って感じ。音聞こえないけど。
さあ、そろそろわたしも進路を真剣に考えないと。
大学に行くべきかしら。
先生に相談してみようかな。
でもあの人たちってたしか、あの大学よね。
レベル高すぎ。
今からじゃとても無理。
できればあと二年くらいほしいもん。
わたしの学力ってそんなもんなのよねえ。
あ、なんかムカついてきた。
なんでわたしってこんなに頭悪いわけ？
もう、この怒りをどこにぶつければいいの？
なんか殴るもんとかあればなあ。たとえば弟とか。あいにくひとりっ子なので。
しかたがないので、枕をぼこぼこ殴りながらストレス発散する毎日です。
ああ、なんかこう、革命的なことないかなあ。

文化祭だそうです。大学のね。
受験勉強もそこそこに進めながらも、大学の実際についても考えながらうだうだしてたら月日
だけひゅんってすぎちゃった。

廃人にならない程度に勉強してるもんだから、じつは元気が有り余ってて、でもそれを発散する
ほどの時間はないっていう宙ぶらりんの毎日を送ってたんだけど、そこに降って湧いた大学祭
。

行かずにいられません。
というわけで行ってみましょう。
友達を誘ったんだけど、みんな受験勉強で忙しいみたい。
みんなすごいなあ。

ずっと図書館とか資料館にこもって勉強してるもんね。

わたしにはとってもマネできないよ。

勉強は長くても一日二時間って決めてんのよねえ。

子供がゲームは一日一時間って決めてる感じと一緒に。

それに比べてみんなはすごい。八時間くらいが普通だって。

でもなんか、わたしはそんな生き方やだ。

余裕がないのが困ったもんなのよ。

やっぱり人間ぽくないっていうか、こう、心のゆとりがほしいのよねえ。

だから、ひとりでいきます、大学祭。

ちょっとさみしいけど。

一番最初に発見したのは、大学生がやってる屋台街だった。

けっこうありきたりなもんばっかなんだけど、看板とかポップが普通じゃない。

「おやこじる」とか、「アイソパラメトリックサーカムスタンス」とか。

すごい意味不明。

すごい変化球だったり、横文字を並べたりしたら勝ちだと思ってない？

それは違うよ先輩方。

ちなみに「おやこじる」がただのお汁粉で、「アイソなんとか」がバニラソフトクリーム。

めっちゃめっちゃ普通じゃん。

このなんていうのか、温度差がオモシロポイントのつもりなんだろうけど、こんなのわたしたちでも考えられるのよね。実際うちの学祭でもこんなのあったし。

とりあえずわたしは両方購入。

まんまとのせられてます。

お汁粉飲んだら暑くなっちゃって、ソフトクリームほしくなったんだもん。

で、今ちょっと寒いです。

それでしばらくぶらぶらしてると、

やっぱりいたよ。

先生方の移動こたつ。

やっぱり鍋やってる。

ちょうどいいや。わたしも入れてもらおっと。

近づいていくと話し声が聞こえてくる。またわけわかんないこと話してるよ。

M「慎也あ、数学クイズ好き？」

S「よし聞こう」

M「うわあ、反応はええ」

S「早く言え」

M「わかったわよお。それでは」

S「前置きはいいい」

M「この問題は、『ガネーシャの読心術』といいます。1～9の中から好きな数をひとつ思い浮かべてみてください。それに9をかけて、十の位と一の位を足し合わせます。その解から4をひき、以下の規則に従ってその解をアルファベットに変換します。

1ならA、2ならB、3ならC、以下同様。

そして、そのアルファベットで始まる名前の動物をひとつ思い浮かべます。ぱっと思いついた動物ですよ。英語に疎い人は失格です。さて、ガネーシャ様の読心術はいかがでしたか？」

S「.....それ、数学クイズじゃないだろう」

M「えええ？ 私これ人に聞いたとき、すごい感動したんだけどなあ」

S「少しでも数学に自信がある人間なら、9と聞いただけで怪しんでしまうものなのだ。そして、扱うレベルから、算数クイズのほうが正しい呼び名であると思われる」

M「そうじゃなくてえ、ガネーシャってところがすごくない？」

S「なぜガネーシャがすごいのだ？」

M「その発想がよお」

S「ガネーシャ以外にいるか？」

M「普通さあ、「某引越センターの採用試験問題ですよ」とか言っちゃいそうじゃない？」

S「どこの世界の普通だ、それは」

M「ええ、私の世界では普通だよ」

S「それにガネーシャは読心術にも数学にも心得はないと思うぞ」

M「そうなのお？」

S「よくは知らんが、知恵と文学の神だったはずだ。ああ、そういえば、富と繁栄の神でもあったような気が.....」

M「自信なさげな慎也って珍しいね」

S「自信がないのではない。記憶が曖昧で検索に時間がかかっているだけだ」

M「そのときの表情がさあ、自信なさそうだなあって思うの」

S「まあどうでもいい」

M「じつはかわいいなあとも思うんだけど、その点についてはどう思う？」

S「だから、どうでもいい」

いやほんと、どうでもいいです。

ガネーシャかカーネーションか知らないけど、わたし寒いしこたつに入れてよ。

「せんせえ」

すごい速度でふたりの先生は振り向きました。

「あ」

「こんにちは」

美雪先生はなんかすごい嫌そうな顔してる。慎也先生はやんわり笑顔。

「こんにちは。先生たち何してるんですか？」

「見たらわかるでしょ」

「わからないよな」

「わかんないです」

「こたつに入って鍋つついてんのよ」

「よかったら君も入る？」

「いいんですか？」

「ちょっと慎也」

「かまわんかまわん。おい、お前は教え子のためにたこ焼き買ってこい」

「はあ？　なんで私が」

「行け。お釣りで好きなものを買っていい」

「行くう」

慎也先生から千円札を受け取ると、美雪先生はひゅんって感じでどっか行っちゃった。

「さあどうぞ」

「ありがとうございます」

こたつに脚を入れると、不思議なことにどこにもコードが伸びてないのにあったかかった。

「これ、なんであったかいんですか？」

「こたつだからだ」

「でも電源入ってませんよね」

「ああ」

「じゃあなんで？」

「こたつだからだ」

会話にならない。

こんな慎也先生とあんなに長いことしゃべり続けられるなんて、美雪先生ってすごいんだ。尊敬するってほどじゃないけど、感心しちゃった。

「この鍋、いつも食べてますね」

「まあな」

「おいしいですか？」

「まあね」

「食べてみてもいいですか？」

「いいよ」

そう言って微笑むと、慎也先生は手前のこたつ布団をめくり上げて中からお皿とお箸を取り出した。

ええええ、どこから出してんですか。

ていうか、わたしが脚入れたときはそんなのありませんでしたけど？

「はい、大丈夫、これきれいだから」

「はあ」

きれいがどうのこうのよりもまず、言いたいことがあるんですけど。

これ、すごいお皿ですよ？

ええと、塗りものっていうの？

すごい高級感。

料亭とかで出てきそうな感じの。

それにお箸も。

先生たちが使ってるのはただの割り箸なのに、これっていいやつじゃないの？

清水の坂にある土産物屋さんとかで売ってそんな感じのやつだよ？

もうほんと、わけわかんないなあ。

まあせっかく出してもらったんだから、いただきましょう。

「いただきます」

「召し上がれ」

真っ赤なスープに浮いた白菜みたいな物体を口に運んだところで、わたしは気を失った。

話し声が聞こえる。

先生たち？

誰？

わたし、どこにいるの？

目が見えない。

開いてないからかな。

それもよくわかんない。

声しか聞こえない。

話の内容が耳に届いて、わたしの脳のいろんなところを刺激してる。

じょじょに目が覚めていく感じ。

あの覚醒の感覚。

もうすぐ目が開けられる。

夢が遠のいていく。

現実が近づいてくる。

目を開けると、

わたしはこたつに半身を入れたまま、地面にぱったり倒れていた。

M「アマテラスの話知ってる？」

S「天岩戸の話か？」

M「そうそう、それえ」

S「知ってるが、それがどうした」

M「あれってさあ、すごい不自然なストーリーじゃない？」

S「どの点がだ」

M「だってさあ、アマテラスが岩の中に閉じこもったら世界が暗くなっちゃったっていうけどお、それっていきなり太陽が消えちゃったってことだよねえ？　なんで？」

S「何が」

M「だから、どうして岩に入る必要があったの、ってこと。いつでも消せちゃうわけでしょ？　アマテラスは」

S「太陽をだな？」

M「そお」

S「なんでもよかったのだろう。岩の隙間だろうが、穴の中だろうが、洞窟だろうが。つまり姿が見えなくなるということが重要なのであって、そうしてあとの話につなげていくテクニックだな。ありていにいえば、御都合主義だ」

M「あとさあ、外で宴会してるからって顔を覗き出すような性格ってのもしれてるよねえ。なんかあ、その程度で？って感じ」

S「口実はなんでもよかったのだろう。『氷河期がきそうだ』だろうが、『ウズメったら、服を脱いじゃダメよ』でもよかったのだ。実際、ウズメの下半身は裸だったらしい」

M「へえ、サービス精神旺盛ねえ」

S「八百万の神々の中には、それで喜ぶ奴らがいたという証拠だな。もしかしたらアマテラスもそれが見たくて岩戸から顔を出したのかもしれない、という考察も可能だ」

M「アマテラスってさあ、女でしょ？」

S「あくまで考察の一部だ」

M「それって単に慎也がやらしいだけじゃない？」

S「さらに言うと、アマテラスが岩戸に隠れて世界が闇に包まれた、と伝説にあるが、太陽と地球の距離は1億5000万kmだ。天文単位の1AUだな。これは光の速度で8.3分かかる。つまり、アマテラスが岩戸に隠れた瞬間に太陽が消失したとすると、地球には8.3分間、日光が照射されていたことになり、すぐには暗闇に世界が沈んだりはしない。よって、この伝説は物理を無視した完全なるフィクションだということだ」

M「そりゃそうでしょ、伝説というか物語みたいなもんなんだからあ」

S「つまり、論じるに値しないものだということだ」

M「そんなこと言ったら話終わっちゃうよお」

S「もういいだろ、アマテラスの話は」

M「そう、じゃなくてえ、話が終わっちゃいやってことが言いたいのお」

S「俺はべつに構わないんだがな」

M「私がいやだって言ってるの」

S「そうか」

M「あんたはそういう奴なの？　かわんないの？　それともわかんないの？」

S「どういう奴か知らんし、変わらないし、わからないことなどない」

M「もう、疲れちゃう」

S「俺も疲れたよ。理不尽な話にはついていけん」

M「ほおんと、最低よねえ。女の子の気持ちなんて、全然どうでもいいんだから」

S「お前だけにかぎった話ではないが、もっと自分が理不尽であることに、皆は気づくべきだろうな。押しつけがましさというのは、プッシュされた側にとっては耐えがたいものだということをな」

M「なんの話？　どういう意味？」

S「それは考えてこい。宿題だ」

身体を起こすと、なんだか知らないけど美雪先生にきっと睨まれた。慎也先生が優しく笑いながら言った。

「起きたな。急に倒れるものだから少しびっくりしたよ」

びっくりしただけ？ けっこう深刻な事態とかは考えなかったんですか？

ていうか、急に倒れたって何？

「あ、あの、何があったんですか？」

「それは私たちがききたいわよ。慎也が言うにはあんた鍋食べたら急にばたんって倒れたらしいじゃない。もう困るのよね、そういう緊急事態って」

なんだかごめんなさいを言わなきゃいけないのかどうか、微妙な状況。

ていうか、あからさまに困られても、わたしが困るんですけど。

仮にも先生じゃないの？

仮にも、ていうか仮じゃないけど、わたし教え子ですよ？

「おいおい、そういう真実を子供に愚直に伝えるな。本気にされたら困るだろう」

「えええ、でもお」

「悪いな。この馬鹿、いや先生が余計なこと言って。冗談だからな」

「はあ」

いや、慎也先生もさりげに真実とか言っちゃってますけど。

「この鍋って」

「ああ、これか。言い忘れていたが、これ死ぬほど辛いから」

そうだよ、遅いよ。

わたし、辛すぎて気絶しちゃったんだよ？

でも傍目から見たら一大事だったと思うんだけど、なんのケアもなしですか。

辛さが原因でただ気を失ったって判断ですか。

それって先生になる人としてどうなんですか。

すごい言いたい。いろいろ言いたい。

でもなあ。

めっちゃめっちゃ美雪先生睨んでるし。

ていうか、怒ってない？

なんで怒ってんですか？

舌が痛い。

ひりひりとかそういうレベルじゃなくて、なんかこう、ざくざく痛い。

歯に触っただけで、包丁でどすどすやられてる感じがする。

もっかいあのソフトクリーム買おうかな。

でもけっこう高いんだよねえ。お金もそんなにないし。

こたつはさっきお暇しました。

ていうか、追い出された感じ。

なんかねえ、美雪先生がねえ。

わたしが慎也先生と話してると、すごい勢いで鍋食べるんだよ。

あんなに辛いのに、トマトジュース飲んでるみたいにごくごくお汁飲むの。

で、すごいげっぷするし。

まわりの人たちがこっち見るんだよね。

それでもなくても道端にこたつってけっこう目立つのに、わりと美人な美雪先生が大声でげっぷしたりするもんだから、居づらくなっちゃって。

慎也先生は声高らかに笑ってただけだったけど。

たぶん慣れてるんだろうな。

いつもふたりでこうやって鍋つつきながら遊んでるんだ。

極辛の鍋いっぱい食べて、そのうち美雪先生が火とか噴いちゃうの。それ見て慎也先生すごい笑ってるの。

楽しそうだなあ。

こういうのが大学生っていうのかなあ。

それなら、ここ目指してみるのもいいかも。

なんか激しく目的を間違ってる感じがするんだけど、こういう目標の立て方のほうがかえって勉強に熱が入ったりするかもしれないし。

ねえ、そう思わない？

わたし、間違ってるかあ。

「間違ってるに決まってるでしょ！」

お母さんはすごい剣幕で、わたしを頭から批難して否定した。

「やっぱり？」

自信はなかったんだけどね。

「でも目指すところはすごいところで」

「そんなの関係ないの！」

「ええ、でもわたしがあそこ受かったらお母さんだってご近所で自慢とかできるでしょ？」

「馬鹿なこと言ってんじゃないの。ご近所の評判なんかよりもね、お母さんはあんたの行く末のほうが気になるのよ」

「だからさあ、あそこならとりあえず入ってみて、いろいろ経験できると思うし。やりたいことだってあるかもしれないじゃない」

「なかったらどうすんの」

「どうって、入って出るだけでもけっこう価値あるんじゃない？」

「だ・か・ら、そんなに誰でも簡単に入れるところじゃないでしょ！」

「そうだけど、せっかく娘が難関校に挑戦してみるって言ってるんだからもっと協力的でもいいんじゃないの？ それとも何？ わたしじゃ不可能だって言いたいわけ？」

「そう言いたいわけだけど、できるだけあんたを傷つけないようにやめさせようとしてる親の心

遣いがわかんないの？ もう十八のくせに気遣いのかけらもない子ね、あんたは」

何が親の心遣いだ。めちゃめちゃ言ってるくせに。

「やっぱりダメかあ」

「もう馬鹿なこと言っていないで、勉強するか本だし買ってきてちょうだい」

勉強するかおつかい行かせるかなんて、どういう親よ。

「じゃあ買ってくる」

「やっぱりね」

「お金」

「はいこれ。あれよ。いつものね。四百円くらいのやつ」

「はいはい」

ひとこと多いのよねえ、おばさんって。

玄関のドアを開いてすぐ居間だったってことは、あんまり経験がない。

正確にいうと、外なんだけど、玄関ドアと門扉の間のスペースにこたつが置いてあって、人間がふたり座って鍋をつついてたの。

ここまで来ると、もう笑っちゃう。

わたしは無言でこたつに入って、机に肘をついて頬杖しながらでっかくため息をついた。

そのまま目を閉じて、先生たちのタイムリーな会話に耳を傾けた。

M「最近さあ、こわい親の話とか聞かなくなったね」

S「こわい親の話？ 当たり前だろう、俺たちはもう大人だ。親が寝る前のショートストーリーを話してくれる時期はとっくに終えている」

M「そういうこわい親の話じゃなくてえ！ こわい親についての話って意味！」

S「こわい親ってなんだ？」

M「いきすぎた親よお。給食費の支払にいちゃもんつけたり、担任の先生が気に入らないとかいって学校に乗り込んだり」

S「ああ、モンスターペアレンツというやつだな」

M「それぞれ、略してモンペンツ」

S「メディアが騒がなくなっただけで、存在が消え去ったわけではあるまい。白装束だってなんたら真理教だって、水面下では今でもその存在を主張しているに違いない」

M「じゃあ表立って取り上げられないだけで、まだ親によるいじめは続いているのねえ」

S「たぶんな」

M「それにしてもさあ、あいつら何様のつもり？ って感じじゃない？」

S「そう思う人間が世間に多いから、あれだけ話題になったのだろう」

M「よねえ！ もうほんと、常識ってもんがないのよお。子供が給食食べさせてもらってんのに、お金払わないなんて、単なる無銭飲食じゃない？ ていうかあ、お金は持ってんだから、踏み倒しっていうかあ、ヤクザ的よねえ」

S「その考察は正しい」

M「それにさあ、いくら教師の不祥事が続けてあからさまになったからってえ、先生全員がワルモノってわけじゃないでしょ？ まともな人だってたくさんいるはずよお。それをさあ、世間の流れにつけこんで？ いいように利用して悪口言い放題なんて、もうありえないよねえ」

S「まったくそのとおりだと思う。性質の悪い人間はいつの時代にもその存在が表立って出てくるものなのだ。いきすぎた検閲や、クリスチャン迫害の歴史などがいい例だろう。人間性の否定にも通ずるところがある。本人たちは真っ当な訴えをしているのだと思い込んでいるようだが、冷静に客観視すれば、いかに自分たちが人間のクズであるかが理解できるだろう」

M「そうそう！ 私、あんな親になんかぜえったいにならない。どんだけ自分の子供がかわいくても、子供のためにも正しさってのをちゃんと守るもん！」

S「それはいい心がけだ。さらに驚愕の事実として、お前がそれほど子供への愛情を謳うとはな」

M「何よう、私にだって、母性愛みたいなもんがあるもん」

S「いかなる事象でも、知らないこととは魅力的なものだな」

M「んんん？ それってさあ、私に魅力を感じたってことお？」

S「俺の話を聞いていたのか？ 知らないことの魅力を語ったのだ。お前個人に魅力を感じるなど、一度も口にしていない」

M「ふん、そこまできっぱり否定しなくてもさあ。そんなじゃモテないよお」

S「悪いが、お前に心配されなくても、俺は平気だ」

M「何よ、私が心配しちゃいけないっての？」

S「なんでそう、いつもケンカ腰なのだ？」

M「え、うーん……わかんない」

S「相変わらず、不思議な知的生命体だな、お前は」

「せんせえ」

「ん？」

「美雪せんせえ」

「私？」

「うちの親ったらひどいんですよ」

わたしは美雪先生に今さっきお母さんと話してたことをさらっと伝えた。

「ねえ、ひどいでしょ」

「いや、それはあんたがおかしいと思うけど」

「えええ、普通ですよお、ねえ慎也せんせえ」

「ああ、普通だな」

「ああ？ あんたまで何言ってるわけ？」

「前向きな捉え方でいいではないか。大学生の実態に関心を持っているのだから」

「大学生がみんなこんなだと思って入ったりしたら後悔するよお」

「そう脅してやるな」

「ほんとのことだし」

「まるで経験してきたみたいな言い方ですねえ」

「ああ？ 生意気がすぎるわよ」

「はあい、ごめんなさい」

「ん、なんかやけに素直ね」

「お前もこの子のようなな」

「はあ？ なんなのあんた、やっぱりロリなのね」

「うるさい。子供の前でそういうこと言うな」

「わたし子供じゃないですよ」

「高校生ってのは子供なのよ。いくらごまかしたってその事実はソリッドなの」

「そりっど？」

「もういいから、ほら、さっさとおつかい行ってきな」

「わかりましたよう」

「そんな追いやるように言わなくても。せっかくお邪魔しているのだから」

「そういえばそうですよ、なんでうちの敷地内にいるんですか」

「なんでって言われてもねえ、慎也」

「そうだな、特に理由があるわけでもなし。君が俺たちの行く先に居合わせすぎなのだ」

むちゃくちゃだよ。理不尽すぎるよ。これが大学生なのね。

「行ってきまあす」

「ああ」

「ゆっくり行ってらっしゃあい。車に気をつけてねえ」

なんか兄と姉ができたみたい。

ふたりともとびっきり変だけどね、そこがいいよね。

おつかいから帰ってくると、ドアの前にこたつはなかった。

なんとなく、こう、この光景が嫌いになった。

こういう感覚ってなんていうんだろう。

センター試験の現代文にあったよね、なんだっけ？

ああ、あれだ。

寂寥感だ。

漢字は書けないけど、感じはわかる。

穴が空いた感じよね。

失恋もこんなだと思う。経験ないけど。

何かを失うってこういうことなのかも。

こわいなあ。

大学落ちたりしてもこういうの経験するのかな。

そう思うと、無理しないほうがいいかも。

できるだけ傷つきたくないし。

臆病者かもしれないけど、わたしって自分がかわいいから。

あ、これはわたしってかわいって言ってるんじゃないよ。

自分が大切だって言ってるの。

でも今はとりあえず、

お母さんに本だしを届けよう。

いまさら予備校に行ってもすっかり手遅れなわたしは、早くも賭けに出ることにした。

ひとつに絞ればわたしにだってチャンスがあるのでは。

だから、わたしはセンター試験にのみ集中することにした。

もう二次試験はムシムシ。

そんなの、どうだっていい。

とりあえずマークシートをいかに効率よく埋められるかに全力を注ぐ。

そうすれば、たとえば私学のセンター利用なんかに引っかかるかも。

そうなれば万々歳って感じで。

もう受かればどこでもいいや的ななげやり感も否めないけど、もうしかたがないの。

遭難したときに人肉を食べないといけないくらい追い詰められてるの。

ああ、われながら気持ち悪いたとえだった。

ゴメン、もう言わないから。

許して。

勉強はどこでもできる性質のわたしだけど、最近なんとなく家ではやりたくなくなってきた。

なんでかな。

こう、気を散らすもんが多すぎるのがいけないのかな。

マンガとか雑誌とか服とか。

触ってると楽しいもんって、けっこうあるからね。

それで貴重な時間がつぶれちゃったら馬鹿馬鹿しいもん。

そういうわけで、最近ではモールなんかに出向いてコーヒーハウスとかアメニティスペースとかで勉強するわたしです。

図書館とか資料館は誰か知り合いがいそうで嫌。

遭っちゃうとしゃべっちゃうんだよねえ、わたしって。

で、今日は家の近くのモールに来ただけど。

アメニティスペースで一層アメニティ能力を向上させてる人たちがいた。

もうわかるよね。

例の移動こたつです。

そろそろ怒られそうなんですけど、大丈夫なのかな。

備えつけの椅子とかテーブルを端に追いやってスペースをつくって、そこにこたつを設置してる。こういうのなんて言うんだっけ？

ああ、傍若無人？

最近わたし、どんどん賢くなってない？

語彙が増えるのって、賢いって意味だよね、違う？

先生たちはやっぱり鍋つついてる。ほんと、どうやって持ちこんでるの？

で、なんで誰も文句言わないの？

このモールは警備の人とかいないわけ？

わたし、今日は勉強したいからなあ。

先生たちに構ってるヒマはないんですよ、ゴメンなさいですけど。

でもあいさつくらいはね、しとかないとね。

こう、礼儀ってやつ？

先生方、わたし、今行きまあす！

M「最近の子供ってさあ、みんな塾行ってるよね。あれさあ、行かされてるのか、自分からすすんで行ってるのかどっちかなあ？」

S「もちろん、行かされているのだ」

M「だよねえ、私もそう思った。なんで親は塾に入れたがんのぉ？」

S「もちろん、馬鹿だからだ」

M「それ、誰が？」

S「親に決まってるだろう。馬鹿な子供など、本来存在しない。馬鹿になってしまったとしたら、それはすべて親の責任だ」

M「慎もったら、ずいぶん辛口じゃない。どうしたの？」

S「どうもしない。思ったことを言っているだけだ」

M「でもさあ、親が馬鹿だから塾に入れるって理屈はどうなの？ よくわかんないんだけど」

S「親は学校の勉強だけでは足りないから塾に入れるのだ、と主張するだろうが、その足りない部分を補うべきは、本来は親自身だ。その責任を放擲して塾に丸投げしているわけだ。それが悪いとは言わない。金でサービスを買っているのだから、普通のことだろう。ただし、言い訳としての、学校の勉強では足りないというのはおかしい。それは前述の理由から明らかだ。つまり、親が馬鹿で子供の勉強を補えないから、塾に入れたがるというわけだ」

M「なるほどお。納得です」

S「さらに考察を重ねると、塾での勉強には本来の勉強としての意味はほとんどないと言っていい。理由は、塾では教育は行われていないからだ。うちは教育します、担当するのは講師ではなく教師です、とうそぶく塾もあるが、所詮塾は塾だ。本来の勉強の観点からでは、塾では教育などできるとは思えない。また教育とは、たとえ学校でもできるものではない。教育機関などと偉そうな名前を名乗っているが、本当のところは、ただのサービス業だ。それは教師という人間を見ればわかる。とても子供にものを教えることのできるような人間がひとりもないことに気づくだろう」

M「なあにい？ 先生はみんな役立たずだって言いたいわけえ？」

S「そうではない。彼らは立派な人間だ。それ以上に、教育とは難しいものだというだけだ。彼らのような立派な人間でも、真の教育には届かない。だから大学の教育学部があって大学院があって、皆で研究を進めているのだろう」

M「うーん、そうなのかなあ。教育ってそんなにムズいもんなのぉ？」

S「そうだ。この事実はあまり世間に認知されていない。だから、塾などのサービス業が人気を博すのだろう」

M「なんか極論すぎない？ だってさあ、そんなこと言っちゃがんばって教えてる学校とか塾の先生がかわいそうだよ」

S「ちょっと教育実習に参加したからって調子に乗るな」

M「べつに、そんなんじゃないもん」

S「教育とは、実行する人間のためにあるのではなく、受け手にあるのだ。つまり子供だな。た

たとえば子供がこんな質問をしたとする。『なんで勉強しないといけないの？』これはつまり、どうして私たちは教育を受けないといけないのですか？ という質問に等しい。これに答えられる大人がいるか？ いやいない。少なくとも、本当に子供が意図したところに合致した答えを提出できる大人は存在しない」

M「そうかなあ。私だったら、『大人になってから社会に出ていけるようになるためだよお』とか『そういう決まりなの！』とか言っちゃうかも」

S「だろう。どちらも子供の疑問には真に答えていない。つまり、大人が子供の意図するところを理解できていないのだ。子供のほうが賢いのだ」

M「大人は馬鹿ってわけ？」

S「そのとおり」

M「なんか慎也ってさあ、子供が絡んだ話になるとすごい辛口になるよねえ」

S「言われてみれば、少し力が入るかもな」

M「なんでえ？」

S「さあ」

M「子供好きなんじゃない？」

S「子供を持ったことも扱ったこともないがな」

M「変な奴よねえ。まあ、そういうのがいいんだけどお」

「こんにちはあ」
「おや、よく遭うな、ほんとに」
「またあんたなのお」
「そう言わないでください。わたしの行く先々にいる先生たちが悪いんですよ」
「なんで私たちが悪いのよ」
「まあまあ、かわいい教え子がいさつに来てくれているのだから、そんな攻撃的な態度は慎め」
「かわいい？」
「かわいいですか？」
「ふたりとも、どうしてそんなに喰いつくのだ？」
「あんたがかわいいとか気の多い態度とるからでしょ！」
「俺が不思議なのは、どうしてお前が怒るのだ、という点だ」
「そりゃ怒りますよお、ねえ美雪せんせえ」
「何あんた、わかってますよおみたいな言い方しちゃって」
「違うんですか？」
「大きなお世話よ。子供は引っ込んで勉強してな」
「ええ、冷たいですね」
「なんの話だ？」
「わたしは勉強しないといけないって話です」
「そうか。じゃあ勉強してこい」
「はい」
「あんたもついでに教えてもらってくればいいのよ。ていうかふたりして教え合って、高め合ってほしいもんだわ」
「えええ、いいんですかあ？」
「あんたは何もしちゃダメよ。勉強だけしてな。で、この馬鹿にいろいろ教えてあげなさい」
「俺は人に教わるようなことは何もない。先にも言っただろう、本来教育というものは不可能事で——」
「はいはい、もういいから」

以来、わたしが勉強しにどこか出かけると、必ず移動こたつがわたしの目前に現れるようになった。

あれかな、サーチング機能っていうか、ええと追跡機能？　みたいなものついてるんじゃない？
でもでも、わたしを追跡する意味とか理由がわかんないし。
まさかわたしに目をかけてくれてて、勉強を教えようとしてくれてるってこともないだろうし。
でも遭ったらこたつに招いてくれて、もてなしてくれるんだよねえ。鍋は食べないけど。

で、こたつ机で勉強するうちに、わたしの成績は驚くほど上がっていきまして。
なんかねえ、参考書とかに載ってないセンター試験のコツとか先生が教えてくれるの。
それに、自分たちのセンター試験のときの逸話とかも話してくれて。
これで傑作だったのがね。

慎也先生の「英語時計アラーム事件」ってやつ。

センターの初日の一発目が英語だったそうなんだけど、試験の途中で慎也先生の時計のアラームがすごい音で鳴っちゃったんだって。

なんか置時計型の電波時計？ 電子時計？ よく知らないけど勝手に時間合っちゃうやつ。
そんなの会場に持ってくる先生もすごいよね。

そのときは残り四十分くらいあったらしいんだけど、先生時計没収されちゃってね。

でもすごいことに、もう全部埋め終わってたんだって！

試験時間半分で全部やっちゃうだなんて、早すぎ？ 見直しし放題じゃん。

やっぱり違うなあ、って思った瞬間でした。

ちなみにその会場教室に美雪先生もいたんだって。

それで、合格してからキャンパス内で顔を合わせたときに、美雪先生が慎也先生のこと、わざわざ笑いに行ったらしいの。

なんか、そういうのかわいいよね。

美雪先生、はじめでやられちゃったってわけ。

美雪先生のツボがよくわかんないけど、まあそういう出逢いのかたちもあるってことよねえ。
いいなあ。

いいなあ。

いいなあ。

やっぱり大学ってそういうところなのかなあ。

わたしも試験会場で目立ってみようかな。

誰か、白馬の王子的な人が発見してるかもしれないじゃない。

先生たちのケースだと立場が逆だけど、わたしが希望してるのが普通の順序よね。

まあそういうちょっと間違っただけ目標も視野に入れつつ、このままの成績アップ率をキープしながらがんばりますか。

飛んで年が明けて、センター試験当日。

ここ数カ月のわたしの躍進ぶりは、新聞の一面に飾られてもいいんじゃないかってくらいのもんでした。

何回か模試も受けたんだけど、なんとなんと、

全体で八割アベレージ叩きだせるようになりました！

これってすごいよ！

何がすごいって、この加速度的成長が！

たとえるなら、昨日までハイハイしてたんだけど翌日にはル・マンに出られるようになったみたいなの。

それは言いすぎか。

でもまあそれくらい、わたしは自分に自信がついたってことですよ。

というわけで、試験本番がんばります！

さあて、まずは持ち物確認。

筆箱、ありまーす。

受験票、ありまーす。この写真は見せられないなあ、ちょっと。

お昼ご飯とおかし、ありまーす。

その他、わたしが完全な状態になれるグッズなどなど、ありまーす。

さあ、気合入れていきましょう！

ああ、この今から大局に臨む感じ。

久しぶり。

新体操の地区大会の予選発表もこんな感じだった。

最初は緊張していい演技ができなかったりして、あとで泣いたもんだけど、できるだけ後悔しないように、自分をプロテクトしながら生きてきた。

傷つかないように。

そのために、失敗しないように。

自分のために。

今回もそんな感じ。

はい、わたし、やります。

試験会場は家から一番近いあの大学です。

なんとなく予感。

いる感じ。

いるよね？

いてくれるよね？

わたしのためじゃなくても。

先生たちってそういう人だよな？

動機は不純で、たとえば緊張して会場入りする受験生たちをのほほんと鍋つつきながら指さして笑ってやろうって、そういう人たちだよな？

わたしにはわかりますよ。

もうずいぶんよくしてもらってきたから。

今日もお話してるんですよ。

わたし、入りますよ。

くぐりますよ、大学の門。

はい、入りました。

ねえ、先生たち。

今日はどんなお話してるの？

M「慎也あ、あの哲学書読んだ？」

S「俺が哲学書など読むわけがないだろう。それにどの哲学書のことを言っているのだ？」

M「あの今はやってるやつよお。ほら、ハーバードの人気講義の」

S「『これからの「正義」の話をしよう』というやつか？」

M「それぞれ」

S「だから、読んでないって」

M「なんでよお」

S「特に興味がないからだ。なぜ売れているのかもわからない」

M「そりゃあ、面白いからでしょう」

S「どう面白いのか、タイトルからは読みとれないな。そもそも「正義」の定義が曖昧だ」

M「正義ってのは何ってこと？」

S「そう。正義とはなんだ？」

M「何って、正義は正義でしょお」

S「べつの言葉で説明しなければ、定義はできない」

M「そんなの知らないよお」

S「正義とは、万人が納得する善だ。しかし、そんなものは存在しない。証明はできないが、人間の思考の多様性を考えれば、存在の確率は極めて低いと予想される。数学的には0と見なしてもいいくらいにな。しかしだ、それでも正義を語る人間は多い。これらは完全なる正義ではなく、多くのコミュニティに受けられる、つまり一般的な正義だ。世の中を広く見ない人間はその正義がすべてだと思いこみ、思考の偏向状態に陥る。そういう連中が、その本を買っているのだろう」

M「またムズい話だなあ。よくわかんないよ」

S「要するに、その本を買う連中が得る正義の概念は完全なものではない、という話だ」

M「じゃあ買う意味はないのお？ それでも売れてるっての？」

S「いや買う意味はもちろんある。完全なる正義が存在しないとはいえ、正義が必要とされているのはまぎれもない事実だ。それも人気のある学者の知見をうかがい知ることは決して損ではない」

M「それでも、あの本に書いてあることは完璧じゃないって言いたいよね？」

S「まあそうだな」

M「慎也なら、そんなこと言うんじゃないかと思ったよ」

S「それはどういう意味だ？」

M「なんとなく、否定するんじゃないかなあって」

S「結果的には否定だが、事実を言ったまでだ」

M「そうだね、これに関してはそうかも」

S「どうにも含みのある言い方だな」

M「なんかさあ、慎也と話してるとさあ、いっつもこう、悪口みたいなことばかり言ってる気

がするんだよねえ」

S「そうか？」

M「そうだよお」

S「そうか」

M「楽しいね」

S「何が」

M「こういう話するの」

S「そう、だな。たしかに、俺はお前と話すのが好きだ」

M「お、脈あり？」

S「なんの話だ？」

M「さあねえ、私なりの正義の話かなあ？」

正義かあ。

なんか、ムズカシイ言葉ですよ。

たしかにこう、きちんとした意味がわからないです。

それにあの本。

どの書店にも売ってますね。

わたしも読んでみようかななんて、柄にもなく殊勝なこと思ったもんですよ。

ねえ、先生たち。

ほら、わたしここにいますよ。

こんなに賢くなりましたよ。

先生たちのおかげで。

教え子がここにいますよ。

今からセンター試験受けてきます。

それで、きっと、

先生たちのあとを追って、

先生たちみたいになりたいから、

この門をもう一度くぐりに来ます。

そうして、四月には、きっと、

同じ門の下で、

一緒にこたつに入って、

いろんなお話がしたいです。

そういう大学生になりたいです。

じゃあ、行ってきます！

「どうですか？」

教授室のボスの前で身を固くしながら、わたしは教授の感想をきいた。

「まあ、あれだな。君これひとりで書いたろ？」

「え？」

「誰にも相談しないで、ひとりだけで書いてだろって」

「いいえ、友人に見せましたよ」

「ほんとか？ 感じ取れるよ、読んでたら」

「よくわかりませんが、まだ見識が足りないってことですか？」

「ダメってわけじゃないけど、このままだが最善だとも思えない」

「それは、これをほかの誰かに見せてセカンドオピニオンをもらってこいってことですか？」

「いや、そういうわけじゃない」

「ええ？」

わからないなあ、教授の言ってることが。

「この大学生たちは実在するの？」

「はい、ふたりとも今はどっかの学校で先生やってるそうです」

「じゃあそのふたりに見てもらったら」

「え、なんでですか」

「いいから、見てもらってきなさい」

「はあ」

失礼します、とおじぎしてドアをうしろ手で絞めてから、わたしは大きくため息をついた。無音のため息だから室内に聞こえる心配はない。

「早く行けえ」

室内から聞こえる声に「ひっ」と息をのんでから、わたしはダッシュでエレベータまで向かった。

現在わたしは大学三回生。さっきのは専門ゼミの課題を提出するいち風景。

わたしは文芸学科に籍を置いている。何をするのかっていうと、まあ、その名の通り文芸に関することを勉強するの。将来的にはライターや編集者、うっかりすれば小説家とかエッセイストとかね。

で、今提出した課題は「経験に基づいた事実をファンタジーに脚色し、短編小説に仕上げなさい」ってやつ。

わたしは自分の高校時代の経験をそっくりそのまま書いてみた。

ファンタジー色に染める必要はなかった。

教授は登場人物のふたりの大学生がフィクショナルだと思ったみたいだけど、本当にいる人たちだし、本当に起こった出来事ばかりなんだよ。

まあそんな説明しても意味ないし、詮ないことだし。

まあそんなのはね、

ひとりだけ、

たったひとりでいいから、

信じてくれる人がいればいいのよ。

先生たちに見せるように教授に言われたけど、

わたしはふたりがどこにいるのかも知らない。

だって、わたしが大学に合格して入学したときにはふたりはいなかったんだから。

そこにあったのはこたつだけ。

わたしは一回生の頃、それを見つけて無人のこたつに入ってみた。

まわりの人たちがすごい目でわたしを見てたけど、

特に気になったりしなかった。

ただ、両隣に誰もいないからさみしいなあって思っただけ。

改めてこたつをまじまじと観察してみると、

けっこう使い込まれている感じで、

もしかしたら代々受け継がれてきた立派なお年寄りのこたつなのかもって、
わたしはこたつから出てひっくり返してみた。
そしたら、机の板の裏に、たくさん名前が並んでいた。
彫刻刀で彫られた、たくさんのお名前。
古いものは、もうずいぶん年代を感じさせるアンティークな味わい。
真新しいものは、わたしにとってすでに既知となっている名前。
その名前は、
わたしの、名前だった。
このこたつに、歴史あるこたつに、
わたしはすでに所属しているんだ。
以来、わたしは移動するときはずっとこたつと一緒に。
ほんとに不思議なこのこたつは、
どうやって一緒に移動してるのか説明できない。
そこがファンタジーなんだけど、
実際にあるんだから、フィクションじゃないの。
大学って、ほんとに不思議なところ。
不思議を司って研究して、世の中に送り出す。
大学は、そういう機関だったんだ。
わたしもいつか送り出されて、
世の中に出ていく。
そのときはきっと、
このこたつを誰かに受け継いで、
わたしは立派な人間になるんだ。
そう、先生たちみたいに。
そういうふうに、
なれるといいな。

「どうだった？」

「うーん、いまいちな感触」

「なんかなあ、あの先生って評価視点が独特だから」

わたしがこたつに入ると、向かいに座る彼が机のうえの鍋から真っ赤な汁をお椀に注いでわたしに渡してくれた。

「ありがと」

「今日も寒いな」

「そうだね」

美雪先生、慎也先生。

わたしは元気です。

先生方はどうですか？

おわり

徘徊こたつとわたし

<http://p.booklog.jp/book/10918>

著者 : Kyoji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ireadforpleasure/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/10918>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/10918>